

参照)。

宇佐宮焼失

この二日前、宇佐宮が田原親家を大将とし、田原紹忍・吉弘統運むねゆきの率いる国東郡衆や、安心院麟生りんしょう・佐田綱・橋津英度はしづひでのりらの宇佐郡院内衆七〇〇〇余人に包囲され、ことごとく焼亡した(『益永文書』一三六号)。

この事件は、宇佐宮や彦山が秋月氏や毛利氏と結び、大友氏の支配に抵抗したために起こったことであった。これらの古代宗教勢力が焼き打ちに遭うことは、源平の争乱のときにもなかったことである。大友宗麟が、キリスト教信仰への傾斜を強めていたことが、宇佐宮や彦山の反発を招いたということはあったかもしれないが、大友氏側が、これら古代宗教勢力を否定し、これを意図的に破壊したとは考えがたい。

六 高橋元種の豊前制庄

豊前衆の離反と

大友方の反撃

天正十年(一五八二)に入ると、下毛郡の強固な大友方であった賀来統直・福島佐渡守・蠣瀬新介・成恒鎮直らがみな野仲鎮兼や高橋元種の支配下に入り、宇佐郡でも、田原紹忍・親盛父子の拠る妙見岳城に近い四日市・元重辺を除いて、秋月方となってしまい、田原紹忍は籠城す



第8図 彦山奉幣殿

ることのほうが多くなった。

天正十一年（一五八三）、大友方の反撃が開始され、玖珠・日田・肥後小国衆と府内衆が、日田方面からと、速見方面からと挟み撃ちする形で、下毛・宇佐二郡へ入ってきた。すなわち、七月十一日、大友義統が豊前境（安心院竜王城カ）へ向けて、豊後府内を出立し、九月二十四日、万田切寄（中津市万田）を攻め、城督広津式部少輔以下一人残さず打ち果たし、十月八日、宇佐郡佐野切寄（宇佐市佐野）へ押し寄せ、十月十六日、是則切寄（中津市是則）を一息に打ち崩した。宇佐三家（宮成・益永・時枝氏カ）から知らせを受けた秋月種実は、伴高橋元種に命じて鉄砲と若干の手勢を送った（『萩原文書』）。豊後勢が帰国すると、「宇佐社中の者共、一雅意のみ企て」て、元重・四日市など、妙見岳麓の切寄にしばしば押し寄せ、その度に、妙見城督田原紹忍が応援に駆けつけるありさまであった。

龍造寺隆信戦死

天正十二年（一五八四）三月、龍造寺隆信が島原半島で島津軍に包囲されて自殺した。龍造寺隆信と同盟していた秋月種実は島津方に降り、毛利氏とも連絡をとりながら、豊後進攻の計画を進めることになった（天正十三年四月二十六日）。

天正十三年八月、島津家久が豊後境まで北上してきたため、豊後国内に動揺が起こり、島津方に寝返る者が出始めた。この年十一月、豊後直入郡の大友一族入田丹後入道宗和は薩摩の新納忠元から調略の使節を受けて、通謀する旨の誓詞をもって、これに答えた。



高橋元種の花押